

報告者氏名：高橋都和 所属：宮城県仙台市立鶴谷特別支援学校 記録日：2022年2月1日

キーワード：自己肯定感，コミュニケーション手段，関わり合い，見通しを持つ

【対象生徒の情報】

・学年

高等部1年生

・障害種別

知的障害，ダウン症候群

田中ビネー知能検査V MA：4歳1か月 IQ：30 (R1，9月時点)

<本人の困り感について>

- ・活動内容に見通しが持てなかったり，苦手な活動があったりすると，気持ちを切り替えることが難しいことがある。
- ・人と関わり合うことに慎重さや臆病さがあり，初対面の人との会話や，人前での発表を苦手としている。特に人前での発表について，前に出た発表や，周囲に聞こえるような声で発表することが難しい。1対1で関わりのある相手と会話する場合は，自分の考えや気持ちを伝えることができる。
- ・コミュニケーション面で上手くいかなかった体験により，自分の肉声で意思を伝えることに強い抵抗感がある。対象生徒曰く，「緊張する。」とのことであった。

<背景>

- ・普通小学校特別支援学級在籍時に，友達から「話し方が変」との指摘を受け，心理的に大きな傷を負ったと思われる。そのような経験から，自分から呼び掛けたり，話したりすることに自信が持てなくなってしまった。

<言語能力・認知>

- ・内言語は豊富である。日常生活において，口答指示が理解できていないと感じることはほとんどない。授業場面では，初めての活動の場合，個別に内容やルールを確認する必要があるときもある。一つ一つ丁寧に確認していくと，理解して行動に移すことができる。
- ・教師と1対1の場面では，自分の考えや予定を自発的に伝えることができる。
- ・教師からの質問に対して，返答することができる。
(例：前に出て発表しますか？ここで発表しますか？→「ここでやる。」)
- ・友達との会話では，友達から話しかけられたときに，「うん。」「そうそう。」といった相づちを返すことができる。
- ・平仮名はスムーズに読めるようになってきた。片仮名も概ね読むことができる。

<環境>

(家庭)

- ・保護者の願いとして，自信を持って，自分の意見を発信してほしいということであった。
- ・家庭内では，保護者に対して学校での出来事や，心情など，多くを音声言語で発信できている。

(学校)

- ・高等部の1年生。男子6人、女子5人の計11人学級に在籍している。
- ・同学級内には、対象生徒以外に発語がある生徒が7名在籍している。友達からの呼び掛けに対しては、頷きやYes/No等、短く返答することができる。

<生徒の願い>

○みんなと同じように発表したり、日直を行ったりできるようになりたい。

- ・採択者に対して、発表するのは「かっこいいこと。」「(日直を)やりたい。」「みんなの前でやってみたい。」といったことを話してくれている。過去のトラウマがありつつも、友達と同じように学級に貢献したい、自信を持って学校生活を送りたいという気持ちが強い。

○様々な人と話したい。

- ・自分の気持ちを伝えたい、わかってもらいたいという気持ちは強い。現在は大人(教師)とコミュニケーションを取ることを好むが、友達とも「話してみたい。」と思っていることを話してくれている。

<使用した機器>

iPad iPhone watch watch chromebook AIスピーカー Pepper

【活動目的】

<目標>

- I コミュニケーションに対する意欲を高める。
- II コミュニケーション手段を増やす。
- III コミュニケーションに対して自信を持つ。

<目標における予想と手立て>

○Iについて

- ・興味・関心のある題材を用いて意欲的に発表に取り組める場を設けることで、自分から「発表したい!」「コミュニケーションを取りたい!」という気持ちを引き出すことができると考えた。
→iPadを使用した調べ学習や、内容を伝える場を設ける。

○IIについて

- ・小集団の中で自分の役割を果たしたり、他者に呼びかけたりする活動を積み重ねることで、コミュニケーションに対する心理的な抵抗感を軽減させることができると考えた。
→「DropTalk」を使用し、日直や係活動時の発表場面における代替手段として用いる。集団の場であっても友達や教師の名前を呼んだり、日付を読み上げたりして役割を果たすことで、自己肯定感の向上に努める。

○IIIについて

- ・活動に見通しが持ちづらいと、その活動に対する意欲が低下し、コミュニケーションを取ろうとする意欲が低下してしまうことがある。活動に見通しを持つための支援があることで、コミュニケーションに対する意欲が高まるのではないかと考えた。
→Apple Watchのリマインダー機能を利用して、何時からどのような活動があるのかを事前に確認できるようにする。

<実施期間> 2021年4月～2022年1月

<実施者> 高橋都和(採択者)

佐藤諒(協力者)

<実施者と対象生徒の関係>

採択者：学級担任

協力者：同学部教諭

【活動内容と対象生徒の変化】

<対象生徒の事前の状況>

- ・本校高等部に進学し、4月当初には本校中学部との違いに戸惑っている様子が見られた。特に学級の編成が大きく変わり、中学部3年生時には1学級4名2担任のクラスであったが、現在は11名4担任の一つの学級となり、以前に比べて雰囲気は賑やかになっている。また、11名のうち4名は外部の支援学級からの入学者であるため、緊張感や不安感が高まっている様子であった。5月に行われた保護者面談では、新しい環境で力を発揮できるか心配しているという声があった（実際に中学部入学時は、不安から教室に入ることができなかつたり、校庭で寝転がり動けなくなつたりしていた）。
- ・発表に関しては、中学部の4名学級のときにできていた日直や係活動も、環境が変わり人数が増えたことで実施が難しい様子であった。
- ・本人とやりとりしながら気持ちを確認したところ、日直や係を行いたいという気持ちは強いことを教えてくれた。

<活動の具体的内容>

○日直ができるようになろう！



DropTalk



リマインダー

- ・日直の仕事は11日に一度回ってくる係活動であり、iPadと「DropTalk」を活用して取り組んだ。日直の仕事は会（朝の会、帰りの会）の進行と、授業前挨拶の号令である。DropTalkの内容は朝の会の内容と合わせて、係の生徒の呼名など、採択者と相談しながら作成した。授業開始、終了時の挨拶や、朝の会、帰りの会の司会役は、前（黒板の前に設置された日直専用席）に出ることを目標にすると採択者と取り決めた。また、日直の仕事を行う際は①どうやって行うか（「iPadを使いますか。自分で言いますか。」）②どこで行うか（「自分の席で言いますか。前に出て言いますか。」）といったように、その都度対象生徒の意思を確認しながら進めるようにした。
- ・iPadはAmazon Ecoと接続し、「DropTalk」で選択した音声を出力できるようにした。

対象生徒の気持ち

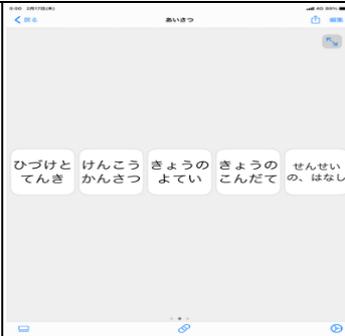
- ・「日直をやりたい！」
→採択者が「今日は日直ですね。お願いできますか？」と対象生徒に尋ねると、「やりたい！」と力強く同意してくれた。やり取りを重ねていくと、「みんなとっしょに（日直を）やりたい。」や、「（係活動は）かっいいい。」など、活動に対する意欲の高さを教えてくれた。

対象生徒の困り

- ・「緊張する・・・。」
→中学部に比べて生徒、教師の在籍人数が多く、注目を集める場での日直は「緊張する・・・。」とのことであった。4月の段階でまだICT機器を活用できる環境が整っていなかった際には、緊張で手が震える状態であった。その際に日直を担当してもらった際には、日直の号令や会の進行項目を採択者の耳元でささやき、それを採択者が代替して学級に伝えるという方法で取り組んだ。

Step1 「自分の席でやってみよう！」

- ・採択者が iPad を提示し、「これを使って日直をやってみますか？」と提案すると、「やりたい！」と意欲を示した。そこでまずは自分の席で iPad を操作し、「DropTalk」を使用して日直を行ってみることにした。iPad は Amazon Eco に接続し、音声を拡大出力することで、クラス全員に聞こえるようにした。

			
<p>図1) 号令で使用したキャンバス</p>	<p>図2) 朝の会の進行で使用したキャンバス</p>	<p>図3) 帰りの会で使用したチェックボックス付きキャンバス</p>	<p>図4) 帰りの会で使用した進行用キャンバス</p>

→「自分の席でできるようになってきた！」

- ・実践を始めた当初は、自分の席で行うときにも「緊張する・・・」とあって、iPad の画面をタップするのを躊躇っている様子が見られた。自分が押す項目が合っているのか不安になっていることが考えられたため、教師が次の項目を指し示しながら「大丈夫です。合っていますよ。」と言葉がかけると、少し安心したように力が抜け、スムーズに画面をタップできるようになった。6月になるとほとんどの操作を一人で行えるようになり、iPad を指差して「これいいね！」と笑顔で語る様子も見られた。
- ・使用したキャンバスは、初め図3のようなチェックボックス方式を採用していたが、実践を重ねていくうちに図2や図4のような端的なキャンバスが使いやすいことがわかった。徐々に「DropTalk」に慣れてくると、図1のように様々な言葉を一つにまとめたキャンバスでも、自分でタップして操作できるようになってきた。

Step2 「見通しを持とう！」  リマインダー

- ・6月になると「DropTalk」を使用した日直にも慣れ、自分の席で行う日直の係はほとんど自分の力で行うことができるようになってきた。そこで採択者は、普段日直を行う際に「自分の席でいいですか。前に行きますか。」という問いを、「前で日直をやってみませんか。」と促す方向へ変化させてみた。初めて採択者から促しを受けたときには、自分の席を指差しながら「ここでやる。」との意思表示をし、自分の席で日直を行っていた。対象生徒に気持ちを確認すると、「緊張する。」とのことであった。しかし採択者とやりとりして日直に対しての気持ちを聞いてみると、「前でやってみよう。」と教えてくれた。
- ・6月2回目の日直の日の朝に対象生徒と相談して、前に行き行くか自分の席で行うかを確認したところ、「自分の席でやる。」という返答があった。そこであらかじめ気持ちの準備が必要なのではないかと対象生徒に提案し、Apple Watch のリマインダー機能を使って予定を表示し、見通しが持てるようになってきた。



図5) Apple Watch のリマインダー

→「緊張感が少なくなってきた！」

- ・ Apple Watch は採択者が日々着用しており、採択者の Apple Watch の Siri にそっと話しかけて反応を楽しむなどして慣れ親しんでいたため、導入の際もスムーズに受け入れてくれた。実際に腕に巻いてみると、「かっこいいね！」と笑顔であった。
- ・ リマインダー 機能を利用してみると、「これ、明日の予定？」と聞いてくるなど、機能と目的を正しく理解することができていた。また、一つ一つタスクを消していく操作が楽しくなってきたようで、日直の前日にリマインダーを確認したときには、「明日も使いたい！」と笑顔で答えてくれた。



図6) Apple Watch を使用して
予定を確認している様子

Step3 「前に出てやってみよう！」 DropTalk

- ・ 7月15日の日直に向けて、前日の7月14日に対象生徒と採択者で作戦会議を行った。Step2 で取り入れたリマインダーも使用しつつ、対象生徒の気持ちを確認すると、やはり緊張するものの、日直を「やりたい！」という気持ち強いことを教えてくれた。そこで相談の上、①先生と一緒に②体をみんなの方ではなく、横に向けることといった条件であれば前に出られるということを決めた。

→「前に出て発表できた！」

- ・ 7月15日の日直当日、初めは緊張している様子を見せていたが、採択者が昨日の作戦会議で決めた内容を確認しながら気持ちを聞くと、「前でやる。」と答えた。いざ日直を行う場面になると少し躊躇う様子もみられたが、「一緒に（皆の前に）行ってみましょう。」と採択者から声を掛けられると、力強く頷き、前の席に座って日直を行うことができた。
- ・ iPad の操作が習熟してきたことで、「僕は iPad があれば大丈夫！」という自信を付けることができた。また、自分で約束や条件を決めたことによって、それを果たそうとする気持ちを高めることができたと考えられる。



図7) 前で日直を行う様子

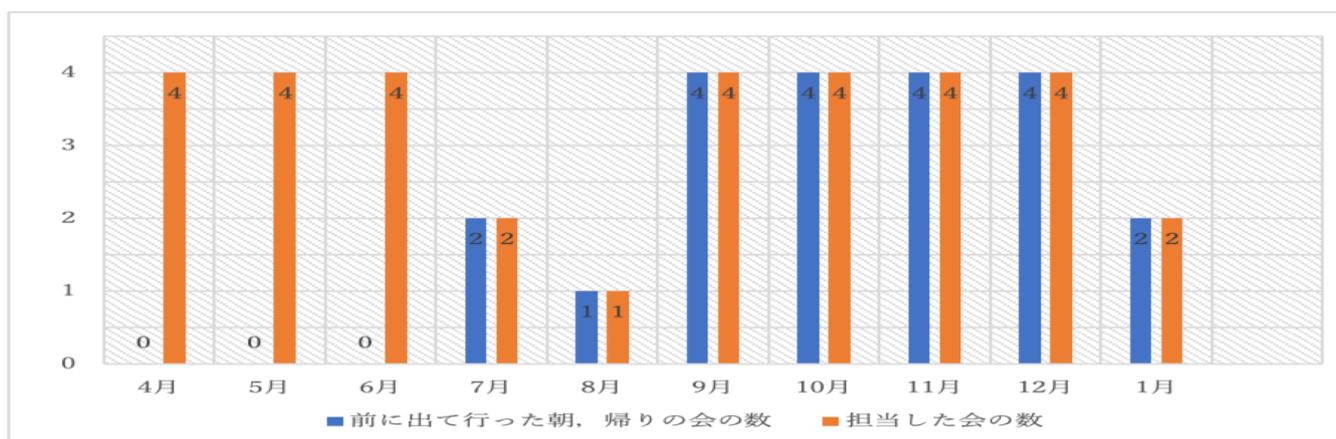


表1) 日直で担当した朝の会、帰りの会の回数と、実際に前に出て取り組むことができた会の数のグラフ
※月に2度担当する。7月、8月、1月は長期休みに伴う担当機会の減少によるもの。8月が奇数であるのは、8月30日に日直を担当した際、学校の都合により帰りの会が行えなかったため。

- ・一度前に出て日直を行なってからは、継続して前に出ての日直ができるようになった。対象生徒が日直を行うときには周囲の生徒も暖かく見守っており、朝の会等の進行を終えると大きく称賛される経験ができるようになったことで自信が付いたようであった。その結果、初めは図7のように体を横に向けた状態でiPadを操作し係を行っていた対象生徒が、前を向いて堂々と取り組めるようになってきた(図8)。図8は10月に学級で行われた終業式で、「はじめのことば」「おわりのことば」を担当した時の様子である。教師、生徒は全員正装で、普段とは違う緊張感の漂う雰囲気であったにもかかわらず、皆の前に立って役割を果たすことができた。無事に役目を終えると、「ぼく、できたね!」ととても嬉しそうにしていた。



図8) 皆の方を向いて係に取り組む様子

Step4 「自分の声でやってみよう!」 Siri

- ・10月下旬になると前に出ての日直に慣れ、皆の方を向いてiPadを操作できるようになった。また、長期休暇後の思い出発表や、校外学習の振り返り発表といった、自分の意見を友達に伝える場を設定して活動に取り組んだことで、発表に対する自信が付いてきた。
- ・帰りの会の取り組みで、「下校方法の確認」という項目がある。そこでは日直が一人一人呼名していき、呼ばれた生徒が本日の下校方法をその場で発表していく形で進められる。対象生徒が日直でないときには、その日の日直から指名されると、「バスです。」「〇〇です(放課後デイサービス名)」と言ったように回答する側に回る。対象生徒の気持ちを確認するため、「(下校方法の確認を)自分で言ってみますか。」と尋ねてみると、「やりたい。」との意思表示があったので、自分の声で行ってみることにした。
- ・実際に帰りの会にて「下校方法の確認」を自分の声で行おうとすると、緊張して言葉がうまく出ない様子が見られた。意欲は高くても、自分の声で発声するには、その練習や経験が必要であることを対象生徒と確認し、自分の声を使って読み上げたり、話したりする機会を増やすことを決めた。
- ・そこで手立てとして、「Siri」を活用し対象生徒の好きな仮面ライダーの画像を検索してみる活動を行った。興味のある内容を調べるために、自分の声でiPadを操作するという体験を積み重ねることで、発声に対する抵抗感を軽減できるのではないかと考えた。

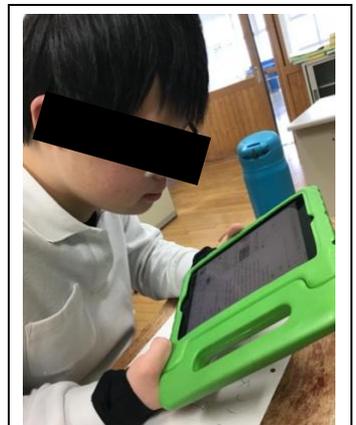


図9) Siri を用いて調べ学習を行う様子

→「自分の声でできたよ!」

- ・初めは「Siri」やAmazon Ecoが反応しないようなときもあったが、「Siri」に反応するようゆっくり、はっきり話すことを意識しながら、楽しんで仮面ライダーの調べ学習を行うようにしたところ、少しずつ自分の声が伝わったという感覚や自信を持つことができるようになってきた。
- ・「Siri」を活用した調べ学習や、文の読み上げ練習を行なっていくと、次第に声を出すことに抵抗感がなくなってきた。11月下旬からの帰りの会では、自分の声で下校方法の確認を伝えることができるようになった。

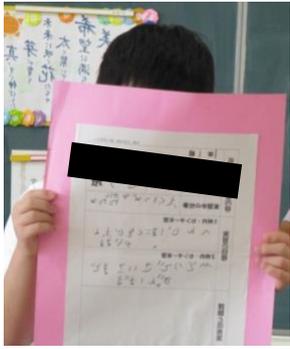


図10) ポスターの裏にあるメモを読み上げる様子



図11) 友達とビンゴの数字を読み上げる様子



図12) 合同自立活動にて意見を発表する様子



図13) 自分の声で日直を行っている様子

- ・図10は、校内実習の際に立てた目標や仕事内容の発表の場面である。ポスターの裏に原稿を書き、それを読むよう促すと、皆の前に立って自分の声で発表することができた。図11はクリスマスのビンゴ大会の様子である。ビンゴの数字を読み上げる役に自ら立候補し、友達の前で数字を読み上げることができた。
- ・図12は本校で設定されている合同自立活動の様子である。本校高等部ではソーシャルスキルトレーニングを年間指導計画の目標に挙げている生徒を一同に会し、合同自立活動という形で一斉指導を行う時間が確保されていて、対象生徒もそのグループに所属している。そこで行われる話し合い活動や、それを受けての発表といった活動において、実践開始当初は緊張して動けなくなってしまうたり、「iPadでやりたい。」と申し出てiPadを使用して取り組んだりすることもあったが、図12にある1月の合同自立活動では、自分の声で発表することができている。
- ・図13は自分の声で日直を行っている様子である。以前から「自分の声でやりたい。」という意思表示はあったものの、やはり緊張からなかなか自分の声での日直はできていなかった。1月21日に日直で朝の会を担当するとき、iPadの充電が切れてしまっていたため、対象生徒に事情を説明して「自分の声でやってみませんか。」と尋ねたところ、「やりたい!」と意欲を見せてくれた。実際に会の進行を努める際には、「〇〇先生、手伝ってください。」と依頼をしてサポートしてもらいながら、自分の声で日直を勤め上げることができた。会の終了後、採択者や学級の先生、友達から「すごいね!」などと言葉を掛けてもらうと、とびきりの笑顔でグータッチをしてくれた。

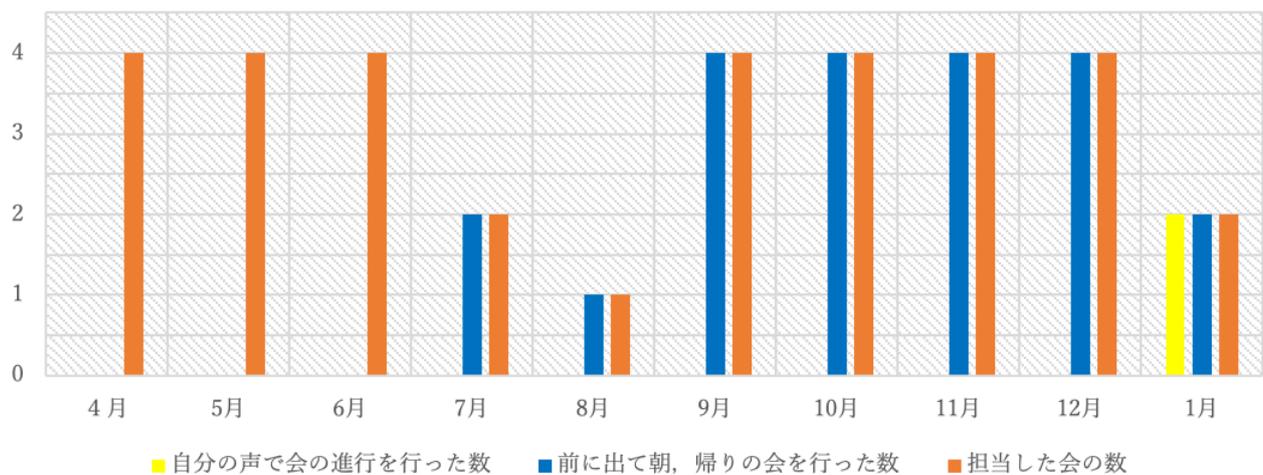


表2) 表1に項目「自分の声で会の進行を行った数」を追加したもの。1月の日直で行った2回の会の進行を、自分の声で行うことができた。

<対象児の事後の変化>

① コミュニケーションに対する意欲が高まった。

対象生徒の願いや気持ちを丁寧に聞き取り、それに合わせて支援をアップデートしていくことで、そのときどきの対象生徒の「伝えたい!」という意欲を高めることができた。また、Step4にて対象生徒の興味関心に即した学習を提示することで、楽しみながら自分の声を使う練習を行うことができた。

② コミュニケーションの手段が増えた。

新しい環境で緊張しているときには「DropTalk」を使用して意見や言葉を代替してもらうことで、学級活動に貢献したいという気持ちを満たすことができた。また、日直や挨拶、発表などを様々な手段で行なったことにより、「DropTalk」を使用せず、肉声でも意思を伝えることができるようになってきた。

③ コミュニケーションに対して、自信が付いてきた。

今回取り上げたのは主に日直の場面であったが、他にも様々な授業で、コミュニケーションに対して自信がついてきたことを感じている。例えば作業学習においても、友達に報告や相談をしながら協力して取り組むことができるようになった。また、挨拶や返事と言った部分でも、以前よりも力強さや自信を感じられるようになった。

【報告者の気づきとエビデンス】

<主観的気づき>

- ・ ICT 機器を活用することで、生徒の困り感であった「緊張」や「不安」が軽減され、自信を持って活動に臨めるようになるのではないかと。

<エビデンス>

高等部に進学し、「中学部に戻りたい……」と呟くこともあったほど不安や緊張が強かった対象生徒であるが、4つのステップを踏むことにより、生徒の願いであった活動に対し、臆せずに取り組むことができるようになってきた。現在は表1にあるように、日直の活動を欠かさずに皆の前で行うことができるようになった。また、ICT機器を活用して自信や意欲を高めていったことにより、1月には自分の声で日直を務めることができるようになってきた(表2)。他生徒との関わり合いの場面も多く見られるようになってきた。高等部から入学した生徒と仲良く遊んだり、一緒に活動したりと、教師を介さないコミュニケーションや交友も活発に行われるようになり、精神的な落ち着きや成長を感じる。実践前と比較すると、担任でない先生からも「発表できるようになったね。」「立派にお話しできるようになったね。」と称賛の声を掛けられるまでになっており、対象生徒のコミュニケーションに対する苦手意識が減ってきたことが分かった。加えて教育実習生が来た際には自分から名前を聞きに行き、iPadで「写真をとってもいいですか。」と尋ねに行くなど、自分から他者と関わろうとする姿も見られるようになった。



図14) 実習生と写真を撮る様子

<今回の実践を通して>

今回1年間対象生徒との実践を通して、ICT機器の活用の仕方について深く考える機会となった。生徒の願いや思いを丁寧に聞き取り、それを達成するための手段としてICT機器を活用することで、コミュニケーションの幅が広がったり、自分に自信が持てたりすることが可能になるのだと考える。今回の実践で言えば、ICT機器を活用することにより、①声の代替手段を得て②発表に対する自信が高まり③自分の声での発表（自立）ができるようになっていく。そうして自己肯定感が高まることで、生徒の豊かな生活に結びつくのだと学んだ。